苦しみの場所

森口美都男

四

ウイリアム・シャイラーは、ナチスが××石鹸なるものの製造を企てていたことを報告している。ナチスは、焼却炉から取り出した灰を肥料として売却するのでは満足しなかったのである。しかも(?)アウシュヴィッツでのガス室への行進の為には「白いブラウスとネーヴィブルーのスカートに身を包んだ、うら若く美しい〔ヒットラー〕乙女たち」の軽音楽団が編成されていて、行列の足取りは軽かったといわれる(William L. Shirer; The Rise and Fall of the Third Reich 1959, Bk.V, § 27 井上勇氏訳第五巻五六頁以下)。あの人たちには、いやわれわれには、水及び苛性ソーダと混合される前に『ホフマン物語』の楽曲を聞かして貰うことを拒む自由がもはやないのである。ナチスは、いやわれわれ自身のうちなるヒットラーは、「われわれ哲学者」、「われわれ技術者」、「われわれ芸術家」は、否々私自身のうちなるヒットラーは、「十二ポンドの×× human fat(ああ何たる綴り)、十クォートの水及び八オンスないし一ポンドの苛性ソーダ……を一緒に二、三時間煮沸し、ついで冷却する」前に、その直前に、まだ温い××に、アマディウス・ホフマン、あのホフマンに縁りある楽曲を聞かせることを思いつくのである。「われわれ企業家」は、

「最良の材料を用いた焼却炉」を試作し、その「能率と耐性」とを保証して、モーツァルトに涙を流したといわれるハイトリヒの「御用命を待った」のである。

十九世紀後半になって、主人対下僕のカテゴリーは廃用に帰し、自由人と奴隷との関係も人間世界から遠からず最後的に消失しうるかに見えた。しかしそれがそうでないことは、ナチスが Herrenvolk の権利としてスラヴ民族に課した強制労働が、古代社会の奴隷には到底想像もつくまい底のものであったことによって全き実証を見た。しかもゲルマン民族以外の民族がナチスによって、有用なあるいは無用な家畜として扱われたのはまだまだ序の口なのであって、ナチスが存続しておれば、一時は「準アリアン民族」などと煽られて悦に入っていたわれわれ日本人も、用が済み次第単なる工業原料へと貶しめられ石鹸に変身させられていたであろう。しかも、地上三十億の人間に対して一人あたり十五頓、総計四百五十億頓の爆弾が貯えられている今日のことは、ヒットラーと雖も想像しうる所ではなかったであろう。核戦争の後には植物さえもが死滅するといわれる。そうなった時、肥料が無用となることはいうまでもないとして、××石鹸は、一体何を洗い落とす為のものとなるのか。

われわれは何人も、他の動物の如く、自分の身体が他の生物の食物とされたり、土地の肥料とされたりして生を終ることを肯じえない。しかしかりに私が、他の飢えた動物の餌食となる為に、すすんで自分の生命を差し出しうるのであれば、私は他の動物たちと同じ様にまた、働かずに食うことに何の不安も覚えずにいられるに違いない。私が人間として、他の生き物によって単に喰われてしまうべきものではなく、他の生命の単なる栄養たるべきものではないということ、私の存在は食物とは本来ちがった存在性格をもっているということ、まさしくこのことが、またそう心得ているということが、私に労苦の必然性をも課してくるのであると思う。生存の可能性が労苦の必然性によって制約されているというその事態は、人間社会の単なる内部事情だけから決まってきているのではあるまい。われわれが

働かずに居る時に覚える特有なあの不安は、少くとも第一次的には、自分が単なる食物的存在へと低下してゆく感覚なのではあるまいか。

少し前までは「働かざる者は食うべからず」という言葉も聞かれたが、近頃では我国でも、人が自分を「勤労者」と称する時にはそこに何か威丈高な恩に着せる含みがききとれる。また他人をそう呼ぶ時には、媚び宥める効果の様なものが計算されている。働かずに生きられて当り前だというのが一般に公理とされてきており、労苦は何か不当なことでもあるかの様である。

実際われわれ人間は、人間だけは、何故働かずに食ってはならないのであろうか？　本能のままに餌をあさる動物は、別に労働だの労苦だのを要求されずに大威張りで食っているではないか。彼らの求餌行動は、勿論無為ではないし、遊戯でもない。しかもそれは労苦というものではない。動物は、衝動のままに、自然のままに餌をあさっているだけなのであり、食を得るために辛いことを忍んでいるなどということはない、一寸でも休みたそうにしているなどということはない。ところが、人間の労働とは、決して人間が衝動のおもむくまま、自然の促すままに為す所の活動をいうのではない。人間は生来怠惰であるとも言われるが、労働する者は辛いのを我慢して、仕様ことなしに、多かれ少なかれ自分の自然衝動に逆らって働くのである。しかもそうせぬことには、人間の場合には生活そのものが奪われるのである。「労働権」などという言葉も、第一次的には生活保障への要求を意味するのであろうが、それは、働かねば食えぬという原則をシブシブ、暫定的に我慢した上で、サアそれでは働き場所を保証せよ、という要求であると見られる。

しかも実は、人間は働くことにこそ蟻や蜂や牛馬の知らぬ生甲斐を見出している。人は、労苦を免除されることを決して単純に歓迎してばかりいはすまい。働きえぬことは、言葉の重い意味で悩みを齎す。労働の必要なくして生活することを保証された人々の多くが、絶望に陥って自らの死を急ぐ。忙しくない時に私は死に度くなる。

「労働権」は決して「生活権」に解消されうるものではない。われわれは、一方では、働かずに食えて当り前だと不服そうに主張しながら、しかも他方で、事は食える食えぬの問題を越えていることにも心ひそかに気づいている。「働かざる者は食うべからず」という原則は、決して社会組織、経済制度の欠陥にだけ由来するものなのではなく、人間同志の取り決めだけで自由に変更できるものでもないことに、心ひそかに気づいている。万人が働かずに食える社会が人間社会の理想なのでもなければ、より少く働いてより多く食えるに従って、社会はそれだけより良き社会になったわけでもないということを、われわれは心のどこかで、今日でもひそかに認めていると思う。そこには人間存在のアプリオリが姿を見せている。働くということは一体どういうことなのか。

人間以外の動物は、自己の負い目なるものは知らない。それはただ取ること、奪うことに熱中し、取られぬよう奪われぬように行動しているだけなのであって、何を出さねばならぬか、どれだけ払わねばならぬかはその意に介するところではあるまい。動物も感覚をもってはいるが、それは自らが取るべきものと、自らを奪わんとするものとの感覚である。動物的個体は、その個体とその属する種との生命の維持のために、それが目下何を欠いているか、何を充たされねばならぬかを、そしてただそれだけを、感じるのである。動物とはひたすら食うことに没頭しているものことであろう。彼らは何をどれだけ、少なすぎぬだけでなくまた多すぎもせずに、取るべきかの正確な感覚をもっており、そしてこの感覚に忠実に自ら肥えふとり、仔を産むことにかかり切っておればよい。それが如何様に他へ出し払わねばならぬかは、そのもの自身の知ったことではない。

その出すべきものに関しては、それを取って食らうものたちが、即ちそのものの敵どもが没頭してくれるのである。動物は借りということを知らない。己れの生きることが、即ち他の死ぬことであることはそれの知ったことではない。（「知る」とはどういうことか。）それの関心はひたすら純一に奪うことのみに集中している。（「関心」とはどういうことか。）―そしてそれの知ったことではないそれの借りは、それ自身とその産んだものたちが他の生の餌食となる

ことによって、即ち他の生きることは己れの死ぬことであるという仕方で、公正に支払われるのである。この清算は、当の食って食われるどの動物個体のでもなく、いわゆる自然の管掌である。

動物にあっては飢えは単純に飢えである。そこには怠りの結果という意味はない。また貸しの意味もない。摂食も単純に摂食であって、それに借りの意味はない。彼らには貸借なるものは無縁である。彼らは、いわば当不当の手前にあり、感謝して生きるのではない代り、殺されて苦情を唱えることもない。動物には苦労はない。しかも動物の摂食行動は決して無為であるのでも遊戯であるのでもない。それこそはまさしく生命がけなのである。彼らは貸借の余裕をもたず、いつも生命がけで、自らの生命を保っているのである。

人間のみが、自己の存在の為に何を取り如何に奪うべきかとともに、何を出し如何に与えねばならぬかを気遣う。人間にあっては、彼から出てゆくものもまた彼自身の配慮すべきことがらなのである。人間もまた、その自然的生命の維持に関する限りは、動物と同じくその慾望によって不足を感じるのではあるとしても、彼の肉体的要求、身体的感覚にしてからが既に決して純一な欠如感覚ではない。彼が飢える時、彼は決して単に飢えているだけではない、それを彼は一般に何か不当なこととして憤るのである。彼は怨み、呪うのである。彼が己れに取りたいものとして感じるそのものは、単に取らざるをえぬものという自然必然性を越えている、何ほどか彼の取ってよい筈のものという意味をもち、何らかの仕方で権利づけられている。彼の飢えは何ほどか彼の貸し——払手が何（誰）であるかは別として——とされる。彼が飢えておりながら怒ることをなしえずにその欠如に甘んじるとすれば、それは、その飢えが当然である如き何らかの理由が別に先立てられており、彼の側から払うべくして払われていぬ何ものかの存在を彼が自認するからである。自分は労を厭うて働かないでいた、自然へ戻すべきものを戻さなかった、供うべきものを供えずにおいた、等々と彼は自らを説諭する。人間にあっては、取るべきものとともに出すべきものもまた、原理的に彼自身の関心事なのである。

人間にあって、飢えが彼の主張する様に、かりに貸しであったとすれば、食うことはその返済をうけることでなくてはなるまい。ところが、この清算はもはや自然の管掌ではない。自然が人間に何を借りていよう。ここの結着は彼自身の労働によって媒介されねばならぬ。しかも先きに言った様に、労働は苦役であり、生命の消耗である。

この労働は、それ自身が、はじめから何か借りの返済であるという含みをもっており、彼が労苦せずにあることは、彼が自分の負い目を未済のままに残している、いな利を積らせて肥らせてしまうと言った意味をもっていた。われわれはこのことを、実際に労を厭う時、却って如何なる苦境に陥るものかという事実に即して既に考察した(三)。働くことなく、労することなくして食らいうることを一度も夢みなかった人は恐らくないであろう。しかもその様にねがう時、われわれは却って労苦以上の窮境に陥ったのであった。そしてそれは決して飢える心配などという種類のものではなかったのである。

「働かざる」人間に対する最も苛酷な侮辱は、むしろ「遊んでおれ」と言うこと、「食い飽くがよい」と言うことではないだろうか。労せずして食らうことには、人間としての自分を殺す意味がひそんでおり、何処を探しても己れの任務というものが見当らぬ時、人は生きる為に「仕事」らしいものを何か捏造せずにはいられない。この捏造によって、本来は生き得ぬ筈の人間が、たとい偽りの生をであれ、とにかく生を営みうる場合は決して少くない。われわれが自殺を思うのは、己れの任務が発見できぬ時、あるいは将来発見できる見込みを独断的に断ち切った時、でなければ、任務を捏造するには余りにも正直すぎる場合なのである。ひそかに自殺を思うている人に対してとりうる処置の一つは、彼に助力を求めることではないだろうか。彼が見るに見兼ねる様な窮境に私があるならば、そして彼が私を見殺しには出来ぬのであれば、私は必ずや彼を死から救いうるのではないだろうか。

われわれ人間の生命には、何か生まれながらの貸しとわれわれが標榜したい様な事情がついているとともに、また生まれながらの借りとわれわれが認めざるをえぬ様な事情がついている。そしてわれわれが生きうるのは、このわれ

われがもって貸しとなすものを払われることによってであるにも拘らず、しかも当方の借りをまず支払ってからでなくては、その貸しとされるものも払われぬ、という様な事情がここにある。

五

その流暢な舌で、自分の苦悩の物語りをいち早く触れまわる人――そのような人は労する者でも、重荷を負う者でもない。

――キェルケゴール（井上良雄氏訳）――

……呪うということの出来るのは、ただ人間だけである（これは他の動物と最大の差異をなしている人間の特権だ）……

――ドストエフスキー（中村融氏訳）――

それについて、貸借なる行為が有意味に語られうるものは、もはや単なる自然的生命ではない。それこそ人格あるいは自己というものにほかならない。「おおクリトン、私〔たち〕は〔アスクレピオス〕に鶏を借りている。忘れずにお返ししておいてくれ」という言葉を残してソクラテスは此世を去った。もはや単なる生命ではなくて、自己である生命であるが故に、人間の生は本質的に貸借関係を含んで成り立ち、その生活体験のあらゆる細部にまで意志によるバランスが入りこむのである。人間が動物とは違って、働かなくては食うことをすら許されぬとともに、また生きているだけには事欠かぬという場合にも矢張り何かせずに居られないのは、結局人間の生命が自己である生命だからである。「自己である」ということがその存在の根本条件に属するからである。働くことが負債の返却という意味を含む限り、少くともその限り、われわれは働くことによって自己であること、人格であることの最少限を確保しうるのである。原理上貸借の主体たる者は、その相手たる主体を認めることによってのみ自らが主体でありうる。その意味では相手をもたぬ単独の自己、孤立した人格なるものは無意味といいうる。他を認めることを介してのみその同一性

の守られ得るものが、その限り自己である主体にほかならない。

しかし、貸しも借りも本来清算されねばならぬものとして、いわばその否定の必然性を内に含んでいる。貸しは返されねばならない、借りは払われねばならない。それらが始末されうること、解消されねばならぬ事を前提せねば貸借はいずれも意味をなさない。自己の他への負い目を返済することにより、また他の窮地に手をさし伸べることによって他と共に生きる生命、その意味で生命の否定を内に含んだ生命、それが自己である生命の本来である。――ただここには、返済が負い目の否定の唯一可能な仕方なのではないという危険が潜んでいる。私は自分の他への借りを返済せずに消してしまう方法を、誰に教わるともなく、物心ついた時以来既に知っていた。それは負い目をいわばその根柢から除去してしまいうるかに思われる方法である。もしも私がそれに重く負う所のあるその者が消滅してしまったとしたら、その者が私に対し私の面する他者として存在することを止めてしまったならばどうだろう。その時、私の彼への借りも同時に存在することを止める筈ではないだろうか。他を、相手をもたぬ自己、自己のみ独りある自己、私がその様な自己でありうることへの誘惑は、私の生が借りを含んでなりたっている限り、そのことの内に既に含まれている。他者を食物とするしかも自らは他者の食物たるべきものでないとされた私の生命は、他なる自己を認めまいとする誘惑をも不断に受ける生命なのである。この誘惑は人間存在のアプリオリに属する。

ドストエフスキーが『地下生活者の手記』の中で、人間を「無翼二本足の、恩を知らぬ動物」と定義しているのも、この事情を的確に表現したものであると思う。恩というのは要するに借りの一種であり、「恩知らず」というのは自己の借りの否定であるが、しかもこの否定は人間存在の積極的規定性なのである。人間とは飢えを、己れの貸しと心得ている動物である。人間は理性的である。「理性的」とは、「均衡を与える」こと、「事態を秩序のうちに齎す」ことであろう。所がこの「理性的」ということのある方向での具体相はまさに「恩知らず」ということにほかならぬ。ドストエフスキーは、自己でありうる生命、いなむしろ自己であるほかない様な生命の本質を、かの定義によっ

ていわばその極限において示したのである。他の何もののでもなく、ただ自己なるものの存在を保証し、確認する為に、人間がどれ程のことを厭わぬものであるか、人間には何故に苦痛の為の苦痛をすら選ぶことがあるのかを彼は語った。人間は単に創られたというだけのものではない、単に自然のうちに発生したというだけのものではない。人間は自然のうちに産み出され、それと交渉しつつ、また自然に対する支配と所有とを標榜せずにおかぬものなのである。しかもその彼の生命は、彼に他より貸し与えられたものという意味をどこまでも保存する。（この根本事実を人間が否定しつくそうとする極限で、人間は死をすらも奪われうるのである。）

他より生命を借りうるものは、それ自身はもはや単なる生命ではなく、生命を越えるが故に生命を受領しうるのでなくてはならない。それはまたその享けた生命を返却しうるもの、従ってまたその自然的生命が失われると共に直ちに無に帰するということのないものでなくてはならない。われわれが「自己の生命」という時のその自己にしてからが、その生命を所有し、自由に処分しうべき事を標榜するものをいうのである。単に借りている生命を、つまり自らの所有ならぬものを、恩を否定することによって自己の所有として着服しようとする者をいうのである。

人間はその生を他者に負う。彼の生も他の生より奪うことなくしては存立することをえない。しかも人間は他者にその生を返えすことは拒むのである。人間は他の動物と違って自己の死を意識しているが、このことは、彼がその死に対しても何程か責任をもっていることを示唆しているであろう。彼は動物の如く奪うことに没頭して、その没頭の中で他へ奪われるものなのではなく、奪い切りで返そうとはせぬもの、また奪うための工夫以上に、返すまい為のあらゆる工夫に没頭するものなのである。

人間がその奪ったものを返さぬのは決して力づくで返さぬのではない。彼は己れの負い目を塗り消すために、負い目を負い目でなくするために、またその証拠固めをするために言葉をつかう。人間は「理性的存在者」として、言葉をもつ生命として、食えてあたりまえだと言い、飢えは貸しだと言う（「生活権」という言葉もこの事態から出てく

る)。しかし負い目を認めまい為に理屈を作為せねばならぬということは、それこそ負い目あることの最も有力な証拠である。彼は自ら作為しつつ内心ではこのことを認めざるを得ない。新らしい術語が発明され、抗弁は精緻となるが、実はそれと共に彼の不安もまたつのるのである。そしてこの不安は一種特有な自縄自縛の様相をもっている。

人間は、常に負い目を塗り消そうと計る者、負い目を踏み倒そうと計る者として、その生存のいわば抵当を要求されるのではないか。一種の抵当として彼はほかならぬ自己の自由を取りあげられるのではないか。労役の中でのみ食がえられるという事情もこのことの表現ではないか。労働が耐え難く辛いのは、決してそれが単にエネルギーの消費であるからではなくて、それが拘束された労働、強制された労働だからである。如何なる激務も、それが人間的自己の自由に出で、またそれを保証するものである限り、決して単に辛労というものではない。

人間の働きには多かれ少かれ奴隷労働の意味が始めからついている。しかもまた奴隷たりうるのは、本来自由なるべきもののみであろう。鳥や獣は奴隷にされることはできぬ。それらは奴隷にされる資格を欠いているからである。忘恩が人間存在のアプリオリに属している限り奴隷状態もまた人間存在のアプリオリに属する。自己をもつもの、人格であるもの、契約をなしうるもののみが、貸借をなしうる。生を借りる為に自己そのものを抵当におかねばならぬということも、彼がもと自由なるものであればこそできるのである。

奴隷とは何か？　奴隷とは、自己の自然的生命の助けられることを願い、この願いのきかれることを条件に、自己の自由を抛棄したものをいう。人間でありながら、家畜ないし単なる道具の境涯を死のかわりに選んだもの、その人格を棄てるかわりに生命を――少くとも彼の解して生命となすものを得たものをいう。

しかし、奴隷もなおその全自由、自己の全部を失いつくすことはできぬ。かかる人格的自由の抛棄の後にも、彼が人間である限り、彼は少くとも自殺することができる。また彼はその自由をば彼の自然的生命と交換に譲渡したといっても、暴動を企てることができる。奴隷も、彼が如何に自由を失いたくてもその凡てを失うことはできないのであ

る。人間とは己れになるべきものである。その限り如何なる人間もまだ人間ではないともいいうる。しかも人間は自由を捨てつくすことができぬ以上、彼が全く人間でなくなるということもまたありえない。奴隷の境涯にあるものが、自己の生命が究極に他者にぞくすることの故に自殺を自ら禁じ、あらゆる苦難に耐えることを選ぶとすれば、それもまた彼の自由によってそうするのである。自由の完全な否定は隷属そのものをも無意味にする。しかも奴隷状態にあるものとは、単に一度限り自己を抛棄したというだけのものではない。彼はいわば己れの自由を不断に抛棄しているのでなくてはならぬ。彼は自由ならぬ存在状態を刻々に選ぶのであり、それに刻々に同意しつつあるのである。

奴隷状態なるものの存在に即してわれわれは、自己と生命とが二者択一の選択肢になりえ、交換可能たりうることを見出す。しかも他方、この選択自身が矢張り自己を前提とすることをも見出す。とすれば自己とは、それ自身を否定しうる如き何かでなくてはならぬ。その否定において却って姿を現わしてくるもの、自己を他者となしうるものが自己なのでなくてはならぬ。

己れの生命を捨てるということと、己れを、自分の自己を、捨てるということとは決して同じではない。生命を捨てるのも、それは自分が捨てるのである。生命を捨てる主体は、そこで捨てられる生命と区別されえなくてはならぬ。個体的生命がその生命を、即ちそれ自身を捨てるという言葉も全然意味をなさぬわけではないとしても、そこに於いて却って、その生命は単なる生命ではない、何か自己を含んだ生命、自己でもある様な生命という意味のものになっているであろう。生を捨てるものは自己である。私が私のいのちを捨てうるのである。

しかしも一度自己を捨てるのは何がそうするのであろうか？　自己を捨てるものは間違いなくその同じ自己であろうか。もし私が、その同じ私を完全に捨てうるものとすれば、その時、私なるものは悉皆無とならねばならぬ。しかし私とはその様な仕方で無に帰しうるものであろうか。否むしろ私とは、まさしく自己を捨つべくしてしかも自らは自己を捨てえぬ者であるであろう。私を捨てることは私自身の能力の中には事実としてないであろう。私とはむしろ

如何にしても己れを捨てえず、どこまでも自己に執するものをこそ言うのである。他を認めぬことにより、他を否定することにより自己ひとり自己であろうとするものを言うのである。だから私は私を捨てねばならぬ者であるとしても、しかも自己を捨てるものは自己であると単純には言えないであろう。しかもまた、自己を捨てる主体はこの自己を措いて、どこにもないともいわれねばならぬ。私を捨てるものが私自身でないのならば、それは凡そ私を捨てたことにはならぬであろう。否、自己を捨て得ぬものは自己の名に価しないとすら考えられる。私は私を捨て得てこそ私に成るといわれねばならぬ。自己を否定しうる者にして始めて自己といわれうる。

私とはたしかにどこまでも私をよう捨てぬものである。しかも私を捨てえぬ私は、その限りまだ私とはいわれない。して見れば、私とはもと、あるいはまだ、私ではないもの、というほかはない。自分のいのちを捨てた者は、そのことによって直ちに自己を捨てたわけではない。むしろわれわれは、自己を捨て得ぬが故にこそ、その生命を捨てざるをえなくなり、さらにそれを厭えば自己を譲り渡さざるをえなくなるのである。

前にわれわれは、働くことは辛いが、働けぬことには更に一層の苦しみが伴うことを事実としてのべた。働くことも働かぬことも共に苦しみであり、生きることは辛さでなければ悩みであり、悩みでなければ辛さである、とも言った。生命の損われる所、骨身の削られる所に苦痛があるとも言った。しかし自己が失われゆく所にこそ始めて真に苦しみと言わるべきものがあるのである。他への負い目を果しえてその限り自己が自己でありうるならば辛労も生甲斐と悦びとを齎す。苦しみの場所は自己というものである。他者との関係における自己の深さに即して苦しみと悩みの重さが増すのである。ただ独りあろうとする自己、他を失うことによって実は自ら失い、それ自身であることを得ていない自己が苦しみのありかなのである。しかしまた、この苦しみの存在は、自己たりうる可能性の指標でもある。

苦なるものを問題にしている時、普通われわれは、思わず知らず自分の苦をまず問題にしている。今自分の嘗めているこの苦しみは何とか除かれえぬものかということばかりを思い煩っている。苦といっても楽といっても、関心の

向けられているのは、自分の現在の苦しみであり、今欠如している己れの楽しみである。苦楽の彼岸などということを聞かされても、そこへ立ちうべきものとして、いつもまず自分のことだけを考えているのである。

私にとって苦なるものが重大なものとなるのは、私がどこまでも自己本位の生を生き、他者なき自己たることを企てているからである。またこのことに気付いて自己本位を脱しようとする時にも、再びまたこのことを自己本位に企てるからである。他人のことなどまるで眼中にない人間、ただただ自分のことだけで頭が一杯である人間が、その限り、苦しみがどうの、悩みがこうのと仔細らしい理屈をもこねるのであろう。苦しい、苦しいと訴えてやまぬ人は、彼の自分中心、自己本位をいわば宣伝しながら自ら苦しみを加重しているわけであり、その限りそれがハタ目に如何に嗤うべき光景であるであろうかは前にも述べた(一)。しかし、そういう人間をも嗤ってはいないで助けようとする者があるのである。自己本位の自己にはその自己本位の故に、その厳存することが見えないが、しかもその自己が独り決めしている様に彼はただひとりあるのでは実はあるまい。苦しみ得ているということが、実はその証拠なのである。自分の苦を苦にしている人間が、自分を嗤わない人間のあることに真に気付き得るならば、かくしてまた自らも他人の大げさな苦の訴えを嗤うことなく助けようとする人間になりえた時には、同時に彼は自分中心の宣伝をやめているであろう。また彼はいつしかひとりある自己より発する苦しみを除かれているであろう。苦しみがあるということは望みがあるということである。

しかし他の苦を嗤わぬ者は、もはや何らの苦しみをも受けることがないであろうか。他を助ける彼は、ひたすら悦楽のうちに住しているであろうか。ああ彼の助けんとする者とは、まさしく頑なに、どこまでも彼に聞かぬものなのである、助力を拒むものなのである、他者を認めぬものなのである。かくして他者をもちえぬということが、この深い自己の側にも起こりうる、否、起こらずには済まない。他の苦悩を医やしうるものこそが、しかも他の苦悩を医やしえぬ故に最大の苦悩を悩むということがありうる。否、そうあるほかはない。されば苦悩の場所は、簡単に自己本

位の自己とばかりはいいえないであろう。苦悩の場所は自己である。何らかの意味で自己のある所に、即ち他に対することによってのみそれ自身でもあるもののある所に必ずまた何らかの苦悩があるのである。他によって自己を無しとされる所には苦しみがある。しかし自己が他を無しとする所には一層の苦しみがある。そして自己自らを与え尽そうとする者が、その捨てられた自己を受けえて始めて生きうる他者の辞退と拒絶とに会う場合には、否、助けを要する者が助けうる者を認め得ない場合には、助けに赴くその者の側にこそ、ああそこにこそ実に如何ばかりの苦しみがあることであろう。

われわれが、今日生きているのは、マックス・ピカートのいう「アトム化された世界」である。アトムとは何か。アトムとは、その内にも外にも自己の他者をもちえぬ存在である。完全な孤絶がアトムの本質である。しかもアトムをすら救わんとする者が存在するのだ、――私はピカートの言葉をそう解する。ピカートが現にアトムに語りかけつつあるという事実は、少くとも私にはそのほかに解しようがない。アトムはもと苦しみを知りえぬ筈のものである。しかもそのアトムをすら救わんとする者が存在するのである。

働くことの必然性は、人間がただ人間だけのことを考え、人間存在がひとり存在の一切を尽くすのであるかの様に考えている限りは、根本的に不可解なことである。人間内部、人間同志の合意には妥当性の限界があり、これを踏み越えることの結果は人間存在そのものの否定となって終るのである。前に言った、われわれにあっての労働が何らかの負債の返済という意味をもつことは、それこそ、単なる自然的生命を越えた人間の存在性格を明示するものにほかならぬ。その負債は決して単なる人類内部のもの、人が人に対して負う負債というだけのものなのでない。われわれは労苦せずに生きられて当然だという主張が正当とされている世界で、まさしくその世界で、生体解剖の対象とされ

ても異議を唱える術がないということ、自分が他人の単なる道具にすぎぬということ、土地の肥料たるにすぎぬということ、いなそれ以上のことが事実として起ってきたのである。*人間が他者への依存の、隷属性の全き廃棄を試みた時、却ってその自己の自由の全き否定が結果したのである。一方で人間は自らを単なる自然的生命へと解消することに努めながら、他方その同じ人間が実在の一切の存在理由をつくすものと標榜し、同類たる人間の皮膚をランプ・シェードに加工し、その脂肪を石鹸に製造するのである。われわれが食人種をおそれたり、奴隷労働を恐れたりせねばならぬ時代は既に遠く遠く過ぎ去った。われわれにはそういう尊厳はもはやない。今日では、われわれが自らを機械の歯車にすぎぬと嘲ることすら、それですら嗤うに耐えた大平楽にすぎまい。単なる工業原料にすぎず室内家具の材料にすぎぬものが、機械だなどと自称するならば、それは思い上りというものである。否、われわれ今日の人間は、ヒットラーから更に進歩している今日の人間は、絞首刑を恵まれずに肉鉤で吊り殺されることをすらも、もはや望みえぬ筈である。プロートン、エレクトロン、中性子、中性微子等の離合集散にすぎない筈の今日の人間には、熱核反応こそが、まさに望むにふさわしい当のものなのではないのか。今日、科学技術者の任務がなおもありうるとするならば、それは文明を、人類を、核爆発の脅威から救う努力などではなくて、そんな事では決して決してなくて、まだしもその被害を選択的に、正確に人類のみに喰い止め、人間以外のあらゆる生命を、その他者否定の暴力から救いうる為の努力であるのではないだろうか。己れの都合だけしか、人間の都合だけしか考えなくなれば、人間は亡びるほかないのである。

（未完）

（筆者　大阪市立大学文学部〔哲学〕助教授）

＊　シャイラーの書物の中には、四の冒頭に言及したもの以上に更に戦慄すべき事実が幾つも報告されている。しかしそれらは実は我々日本人も毎日、自ら目撃しえていることであり、外国に起った特殊現象なのではない。この点につき、筆者は吉村英一博士「人間の没落」（『医療の広場』第二巻第十一号）に負う所が多い。